『英語史研究会会報（研究ノート）』2006 年, pp. 1-5.
Copyright © 2006 by Yoko Iyeiri

英語の否定構文における *neither* A *nor* B と *neither* A *or* B

家　入　葉　子

並列する二つのものを同時に否定するときに使用する構文 *neither* A *nor* B には、いわば異形の構文として *neither* A *or* B が存在する。頻度が少ないことに加えて、標準の書き言葉で認められていないこともあり、記述的な辞書でも取り上げられることは少ない。何かの偶然によって *nor* の代わりに *or* が紛れ込んでしまったと解釈されたり、二重否定を避けようとする意識から *nor* が *or* になってしまったと考えられることもある。しかし、語法書の中に *neither* A *or* B を「誤った用法」であると記載しているものがあることから、*neither* A *or* B が実際の言語使用において想像以上に拡がっていると推測することもできる。たとえば、Whitcut (1994: 200) は、“The *neither* … *or* type, which is wrong in ‘Having *neither* weapon *or* clothes’ or ‘He *neither* knew that fellow or wished to know him’, is, in short, usually wrong …” と述べている。また *The American Heritage Book of English Usage* にも “As a conjunction *neither* is properly followed by *nor*, not *or*, in formal style: *Neither prayers nor curses* (not *or curses*) *did any good*” (p. 21) という記述がある。

そもそも *neither* A *or* B は、歴史的に根拠のない形ではない。*OED* (s.v. *neither*) には、16 世紀、17 世紀、18 世紀、19 世紀からそれぞれ 2 例ずつ、合計 8 例の *neither* A *or* B が引用されている。また Iyeiri (2001: 146) でも指摘したように、15 世紀以前にも *neither* A *or* B は

起こる。以下は、*The Canterbury Tales* からの引用である。

(1) When she had herd al this, she noght ameved
Neither in word, *or* chiere, *or* contenaunce (“The Clerk’s Tale”, 498-9)[1]

Handlyng Synne から引用した（2）では、*neither* のところに *noþer* という形態が使用されているものの、やはり *neither* A *or* B の例であると考えてよい。

(2) For þe soules are no þyng
Wrsheped wyþ þat offryng,
Noþer vs to counseyle *or* to rede (*Handlyng Synne*, 7965-7)[2]

中英語の例があまり多くないとすれば、それは中英語の否定構文全般の傾向を反映したものであるということもできる。すなわち、中英語では同一文中で否定語を複数用いる多重否定が近代英語よりも多く、否定形にできる要素を否定形にする傾向がより強いからである。逆にいうと、*neither* A *or* B の頻度は近代英語に入ってから増加してもおかしくない。

Rissanen (1999: 270) は、古英語・中英語の *neither … ne* が近代英語になると *neither … nor* に置き換えられていくという記述に際して *neither … (n)or* という表記を用いており、*nor* の代わりに *or* が起こることを示唆しているが、実際に挙げられた例文で *or* が用いられているものはない。しかし、*or* の使用は近代英語でたしかに拡大する。たとえば 18 世紀の文学作品を読んでいると、*neither* A *or* B の例を見出すのは比較的容易である。*Tom Jones* や *The Spectator* などを含む広範な文献の中に *neither* A *or* B の例を確認できるが、とりわけ注目に値するのが *Robinson Crusoe* である。以下では、*Robinson*

---

[1] Geoffrey Chaucer, *The Canterbury Tales*, ed. Larry D. Benson, *et al*. (Houghton Mifflin, 1987) より引用。
[2] *Handlyng Synne*, ed. Idelle Sullens (Center for Medieval and Early Renaissance Studies, Binghamton, 1983) より引用。

Crusoe における *neither* A *or* B を少し詳しく見ることにする。

Robinson Crusoe には、*neither* を使って文の要素を連結する例が 27 あり、そのうちの 25 例 (92.6%) が以下の例のように *or* を使用している。[3]

(3) … so I ventur'd to make to the Coast, and came to an Anchor in the Mouth of a little River, I knew not what, or where; *neither* what Latitude, what Country, what Nations, *or* what River: I *neither* saw, *or* desir'd to see any People, the principal thing I wanted was fresh Water: …
(*Robinson Crusoe*, 24)

(4) … for if I should be taken with a Fresh of Wind I might *neither* reach one *or* other. (32)

(5) How we were to have this done, when I knew they had *neither* Pen *or* Ink; that indeed was a Question which we never asked. (248)

残りの 2 例のうち 1 例は以下のもので、*or* と *nor* を同時に使用している。

(6) He told me, they were all of them very civil honest Men, and they were under the greatest Distress imaginable, having *neither* Weapons *or* Cloaths, *nor* any Food, but at the Mercy and Discretion of the Savages; … 245)

(6) では *or* によって連結された weapons と cloaths がまとめて否定のスコープに収められていることから、*nor* によって連結された any food よりも連結の度合いが強いと解釈することも可能かもしれない。また、残りの 1 例は、以下に示す *neither* A *nor* B の構文を示している。

[3] ただし、版によっては *neither … or* が *neither … nor* に変更されているものもある。小論では、初版をもとに校訂された *The Life and Strange Surprizing Adventures of Robinson Crusoe, of York, Mariner*, ed. J. Donald Crowley (Oxford World Classics, 1983) を用いた。

(7) I got on Board the Ship, as before, and prepar'd a second Raft, and having had Experience of the first, I *neither* made this so unweildy, *nor* loaded it so hard, but yet I brought away several Things very useful to me; … (54)

この場合も、*neither* と *nor* によって連結された A, B が比較的ゆるく結びついているといえないこともない。A, B に当たる要素は時制をもつ動詞になっている。時制をもつ動詞は、それだけで文を構成する条件を整えているからである。しかしこのような意味づけをするよりも重要な点は、*Robinson Crusoe* において *nor* を使用することがむしろきわめてまれであるという点である。そもそも *neither* … *or* の方が一般的な構文になっているのである。

Robinson Crusoe のように *neither* A *nor* B が少数派で、逆に *neither* A *or* B の方が一般的に用いられる文献はそれほど多くないかもしれない。しかしながら、このような文献の存在は、*neither* A *or* B の歴史的意味を再検討する機会を与えてくれる。今日の英語で使用する *neither* A *nor* B も、*neither* A *or* B との歴史的共存関係の中から確立してきた形と考えることもできる。英語の多重否定の歴史を分析する際に、*neither* A *nor* B をいわば「普通の構文」として簡単に片付けてしまう傾向がある。しかし、もし何らかの要因によって *neither* A *or* B の方が確立していたとするならば、*neither* A *nor* B に違和感を覚えていたかもしれないのである。

Peters (2004: 370) の *neither* A *nor* B に関する記述は興味深い。まず現代イギリス英語のコーパスである BNC に約 100 例の *neither* A *or* B があることに言及し、*nor* を使用することが普通であるとしながらも、“Yet *neither – or* is a legitimate construction. It actually extends the negative scope of **neither** over both or all the alternatives mentioned. … Provided the alternatives match each other syntactically, the negative parallelism of *neither – nor* is still achieved with *neither – or*, and it underscores the set rather than its members”と述べている。さらに興味深いのは、“The *neither – or* construction is likely to become more rather

than less frequent, given the general decline in the use of *nor*”として、*neither … or* の増加傾向を指摘している点である。

Tieken (1995: 20-2) は Marlory の多重否定を分析する際に、Barber (1976: 283) による「一つの文中に打ち消し合わない否定語が二つ以上存在している」という多重否定の定義に言及し、現代英語で許されている *neither* A *nor* B が排除できないこの定義は修正が必要であると考えた。たしかに *nor* は論理関係を逆転させることなく要素を連結することができるので、少なくとも I do not know no one else のような典型的な多重否定とは性質を異にしている。しかしながら、現代英語を基準にした判断に傾倒しすぎると、現代英語自体が変化しているという事実が見えにくくなる。Peters (2004: 370) が述べる *neither* A *or* B の増加が今後も継続していくと仮定するならば、*neither* A *nor* B の構文の見え方が変わらないとも限らない。

参考文献

The American Heritage Book of English Usage. 1996. Boston & New York: Houghton Mifflin Company.

Barber, Charles. 1976. *Early Modern English*. London: André Deutsch.

Iyeiri, Yoko. 2001. *Negative Constructions in Middle English*. Fukuoka: Kyushu University Press.

Peters, Pam. 2004. *The Cambridge Guide to English Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.

Rissanen, Matti. 1999. “Syntax”, in *The Cambridge History of the English Langauge, III: 1476-1776*, ed. Roger Lass, pp. 187-331. Cambridge: Cambridge University Press.

Tieken-Boon van Ostade, Ingrid. 1995. *The Two Versions of Malory’s* Morte Darthur: *Multiple Negation and the Editing of the Text*. Cambridge: D. S. Brewer.

Whitcut, Janet (ed.). 1994. *Eric Partridge, Usage and Abusage: A Guide to Good English*. New York & London: W. W. Norton & Company.